

2023 年度 第 1 回オープン実践研究会報告

実践研究委員 守内映子(日本映画大学)

2023 年 12 月 17 日(土)13 時半～16 時 Zoom によるオンラインで、実践研究委員会が主催する本年度初のオープン実践研究会が実施された。本研究会は、学会の会員に限らず研究実践者、研究者、教育関係者に広く参加していただき、優れた実践を掘り出し、その実践の英知を共有するという趣旨を持つものである。

今回のオープン実践研究会では、子どもの無限の可能性を追求した斎藤喜博の追求の授業をルーツとした、課題追求型授業の実践研究を進める西多摩授業の会の研究を中心とした発表を行った。テーマは、『学びの構え』を子どもに育む 学級・学校づくり」であり、「学びの構え」についての提案と小学校での実践報告、そして、学校経営の観点からの報告が行われた。当日の参加者は、小・中学校および大学の教員とその他一般の方を含めた 30 数名であった。また、当日の司会は佐藤栄太郎委員、全体会のファシリテーターは西尾理委員が務めた。プログラムは次の通りである。

(1)提案

「学びの構え」を育む学級づくりーコミュニケーション能力と注意の集中力が「学びの構え」を育む：松山豊(福島県須賀川市立長沼東小学校)

(2)実践報告

- ① 教師 2 年目の実践～3 年生担任として取り組んだこと～
 - ・小笠原菜月(八王子市立檜原小学校)
- ② 「学びの構え」を子どもに育む学校づくり
 - ・隅内利之(隅内教育研究所)
- ③ 「課題追求型授業」～映像で振り返る 4 要素～
 - ・駒形真央(八王子市立檜原小学校)

(3) グループ討論と全体討議

(4) 総括：多田孝志(目白大学名誉教授・金沢学院大学)

上記のプログラムについて、以下に概要をまとめる。

(1) では、授業そのものから「学びの構え」をもった子どもたちを育てる提案がなされた。「追求方式の授業」を実践されてきた先達である戸田淳子先生の国語科授業を VTR で共有しながら、年度始めの 4 月と年度末の 3 月の学級の変化から、子どもたちに「学びの構え」が習得されるとはどういうことであるのかといった分析が行われた。そして、「学習能力」を育てることが「学びの構え」につながるのだという考察がなさ

れた。「学習能力」とは、大きくは「コミュニケーション能力」と「注意の集中力」であること、注意をどこに向けるのかは教師が教えることが肝要であると述べられた。さらに、「学習能力」は、1年を通してゆっくりと育てるのではなく、新学期のスタートから1か月で育てることが重要だということ、前述の戸田先生の異なるVTRから解説がなされた。特に、「コミュニケーション能力」に関しては、1.主体性、2.表明性、3.聴取性といった三つの柱が挙げられ、それぞれについて具体的かつ詳細な説明があり、参加者には分かりやすかったと推測される。

(2)の①では、クラス担任としての報告があった。「学びの構え」をつくるために、クラスの子どもたちが「次に何をするか分かっている状態」を価値づける取り組みが紹介された。朝の支度や教室移動、テスト直前や国語の授業中、そして掃除中といった異なる場面において、子どもたちの注意をどこに集中させるのか、そこでは教師が明確な意図を持つことの重要性が明らかにされた。具体的な言葉かけや子どもたちの気づきが語られ、以前は指示されないと動けなかったクラスが、主体的に考え行動するようになったという大きな変化が見られたという実践であった。

次に②では、学校経営の側面から、「学びの構え」を子どもに育むためには、授業研究を学校経営のトップ項目に据えることが重要であるといった実践報告がなされた。

「教え込み」からの脱却として行われた授業改革は、斎藤喜博の研究者である宮坂義彦先生の授業理論に基づいた「課題追求型授業」に発展した。発表者の11年間の校長在任期間における、実際の授業風景をVTRで共有することができた。学校全体で取り組むことによって、子どものみならず教師も変わっていったという成果が語られた。

さらに③では、「課題追求型授業」に取り組んだ実践の授業映像を見ながら、「教材への集中」と「友達への集中」という観点からの報告が行われた。3年生国語科『かえるのぴょん』から「問題作り」の場面が紹介され、クラスの子ども達が「教材に集中」しながら主体的に授業に参加する姿が確認できた。また、6年生国語科『やまなし』の授業場面では、「課題追求型授業」の特徴でもある「論証」と「イメージ形成」を生かした取り組みによる「教材と友達への集中」、そして、楽しさや心地良さを実感できた子ども達の「反応」が示された。ここでは、「課題追求型授業」によって学習能力が育ち「学びの構え」が身についていく様子が明らかになったと言える。

以上の実践報告については、司会の佐藤委員より、「課題探しが子ども達の集中を高めている」「子ども達を授業に引き込むおもしろさが学習能力を高め、学びの構えがで

きることに繋がる」といったまとめがなされた。なお、今回の研究会開催にあたっては、八王子市立檜原小学校校長であり、西多摩授業の会の中心的メンバーである、佐藤委員の尽力があったことをここに報告する。

(3)では、まず、ブレイクアウトルームに分かれて、各発表「学びの構え」についての感想と日々の実践の中で心掛けていることや悩み、及び質問について話し合った。4名程度のグループで30分の討議であったので、比較的ゆっくりと話し合うことができた。つづいて、メインルームに戻り全体協議に移った。ファシリテーターの西尾委員より、「教授法以前の“構え”の部分を中心据えた今回のような研究会は画期的な試みだったのではないか」との話があった。そして、フロアからは、「教材が学びの構えをつくるために大事であることが確認できた」「対話の要素が学びの構えをつくと再認識した」など、グループ討論を経てのコメントがあった。さらに、初めての参加者からは、「共感し刺激を受けたので、今後は現場で実践に生かしていきたい」「今回の研究会を機に今後も交流を深めたい」などの感想も聞かれた。

(4)では、当日に業務の都合で参加できなかったことから、事前に預かった多田孝志顧問の映像より「対話授業」を視聴した。そこでは、授業改善の視点として子どもの思考を深めるプロセスの6つの視点が提示された。また、対話の型が3つ(プラスワン型、スパイス型、授業全体型)紹介されそれぞれに関する解説が行われた。今回の研究会のテーマと通じるところとしては、教師の問いかけや環境設定の重要性及び、教材研究が学習者の基礎力の育成につながるといった点であった。残念ながら、時間の関係から限られた範囲での視聴となってしまった。参加者の方々にはデータを各自で共有していただく方法を採用した。

最後に、担当関係者による振り返りをまとめる。まず、良かった点は、参加者全員が発言する機会があったことと、全体討議においては指名ではあったものの、積極的かつ建設的な意見をバランスよく聞くことができたという収穫があったことだ。また、休憩時間を挟んだグループ討議では、参加者の入退室によりメンバー編成が大変であったが、PC管理の湯澤卓委員による臨機応変な対応でスムーズに運営できた。一方、今後の課題としては、開催時期が挙げられる。学校関係者にとって繁忙期にあたり、参加を表明しておりながら諸般の事情で直前になって参加が叶わなかった申込者が多数出てしまった。次回の開催日程については、さらに検討する必要があるだろう。